

| | |
|---------|-----------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 288 |
| 区分 | 治療論・予後 |
| タイトル | 予後の判断について |
| 著者 | 八木素萌 |
| 作成日 | 1989.09 |

◎五つの側面

- イ. 病因と病臓の関係が五邪（正邪・実邪・虚邪・賊邪・微邪）の何れに相当しているか？
- ロ. 病症と脈状の関係に、それぞれの性質の関係に順逆の程度が、どうなっているのか？
- ハ. 病臓には病の性質の五行性がある、それと、季節や時間などの関係がその病に及ぼす影響は、どんな具合に示されているのであろうか？
- ニ. 患者の体質やライフスタイル、節制や養生と、病との関係が、適切であるのか？
それとも不適切であるのか？
- ホ. 患者の回復力の強弱はどうであるのか？

これらが総合的に把握されて、予後を判断するという事が肝要であろう。

『難経』には、上のイ・ロ・ハの3点が述べられている。

◎「間臓」・「七伝」・「五邪」

- イ. 病が相生的に伝変して行く場合を『間臓』と言う、『間臓』は「子母相伝」であって「死ぬことは無い」し「治し易い」と認識されている〈53難〉。また『間臓』は陽病・腑病の伝変様式とされている〈54難〉
- ロ. 病が相剋的に伝変する場合を『七伝』と呼んでいる〈53難〉。『七伝』は陰病・臓病の伝変様式で難治と認識される〈54難〉。それはまた、「ハ」に記述していることとの関連から、或る条件のもとでは『積聚』となりがちであると認識〈56難〉されている。
- ハ. 病邪を五行的に把握して、『難経』は「中風」「傷暑」「飲食労倦」「傷寒」「中湿」としている。この分類は『内経』とはやや異なっているが、臨床的に発展させたものであると思う。

「中風」＝木邪・「傷暑」＝火邪・「飲食労倦」＝土邪（『内経』は“湿”を土邪に担当している、『難経』で言う「湿」と語彙内容が異なっている）・「傷寒」＝金邪（『内経』では「燥」を当てる場合が殆どである）・「中湿」＝水邪（『内経』では「寒」としている）、これらの五種類の病邪と五臓との関係が、どのようになっているか？によって、そのありようを「正邪」「実邪」「虚邪」「微邪」「賊邪」として表現する。したがって、 $5 \times 5 = 25$ の種類となる訳である。つまり、『五邪』と言う場合には、

- a) 病邪の性質を五行的に分類把握した内容を言う場合
- b) 病と病邪の関係性を表現している場合

この二つがあるので読み取るときには注意が必要である。

二. 『五邪』論を表示すると、次のとおりになる。

表 1

| | | | | | |
|------|----|----|------|----|----|
| 五邪 | 木 | 火 | 土 | 金 | 水 |
| 五臓 | 中風 | 傷暑 | 飲食労倦 | 傷寒 | 中湿 |
| 肝(木) | 正邪 | 実邪 | 微邪 | 賊邪 | 虚邪 |
| 心(火) | 虚邪 | 正邪 | 実邪 | 微邪 | 賊邪 |
| 脾(土) | 賊邪 | 虚邪 | 正邪 | 実邪 | 微邪 |
| 肺(金) | 微邪 | 賊邪 | 虚邪 | 正邪 | 実邪 |
| 腎(水) | 実邪 | 微邪 | 賊邪 | 虚邪 | 正邪 |

表 2

| | | |
|----|--|---|
| 正邪 | 臓腑の五行と同じ五行的な性質の邪に冒される 例…肝〈木〉—風〈木〉 | A |
| 虚邪 | 臓腑の五行にとって母親の立場にある行の邪に冒される 例…肝〈木〉—湿〈水〉 | B |
| 実邪 | 臓腑の五行にとって子の立場にある行の邪に冒される 例…肝〈木〉—暑〈火〉 | C |
| 賊邪 | 臓腑の五行にとって剋されている行から更に強い剋を受ける邪 例…肝〈木〉—傷寒〈金〉 | D |
| 微邪 | 臓腑の五行にとって剋している行の侮りを受けたものの邪 例…肝〈木〉—飲食労倦〈土〉 | E |

表 3

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 五臓\五邪 | 正邪 | 虚邪 | 実邪 | 微邪 | 賊邪 |
| 肝(木) | 中風(木) | 中湿(水) | 傷暑(火) | 食労(土) | 傷寒(金) |
| 心(火) | 傷暑(火) | 中風(木) | 食労(土) | 傷寒(金) | 中湿(水) |
| 脾(土) | 食労(土) | 傷暑(火) | 傷寒(金) | 中湿(水) | 中風(木) |
| 肺(金) | 傷寒(金) | 食労(土) | 中湿(水) | 中風(木) | 傷暑(火) |
| 腎(水) | 中湿(水) | 傷寒(金) | 中風(木) | 傷暑(火) | 食労(土) |

註

1. 飲食労倦は土であるが、食労と略記した
2. 傷寒を内経では燥としている、秋気を一言で表現したものである。秋には大地になお夏の暑の名残を残している、空の乾燥して清涼な気に対しては、冬の大地の氷冷な気とは異なっている。従って、“肺を冒す空からの乾燥した寒さ”の邪であると解する事が、臨床的に実際に適う。
3. 難経の中湿とは、内経で言う寒である、難経の特徴的な表現である。内経にいう湿は“長夏の気”と解されているように、ムシムシと籠っている草イキレの暑苦しい湿気、若しくは、湿熱や湿冷にもなるような湿、を指している。
これに異なっていて、難経は、冬の万物を閉込めてしまう氷結の厳しい氷冷さ、冬の肌を切るような寒さ、これを冬気・水気として認識している。従って、“湿傷于下”と言うように“下から痛いような痺れるように厳しく冷え上ってくる寒冷さ”として解することが正しい、これが難経の記述全体から言えるのである。
4. 内経は“土”気を“湿”としているが、これは、中央の卑低・多湿・豊饒・温暖な土地柄を、一言で“湿”と言ひ、“中気”と言っている事、また、長夏の化生作用は正に豊饒へ向けた作用でもある事、四季の終・季節の変わり目を土用＝“中気”と把握している事、これらに総て共通するものは“化生”に他ならないが、これらの“気”を“湿”として表現した事、等々の故である。換言すれば“土はあらゆる命を育てているもの”“土は後天の根本”であり、“湿”抜きには土のこのような力・作用が考えられない、と言う事である。難経もこのことを明らかに捉えている、それは4・5・13・14・15・42・56等の諸難の記述を、丁寧に臨床的に読み込む事によって、明らかになろう。難経の以上のような“湿”観から2種類の“湿”～つまり‘陽’的な“湿”と陰的な“湿”と言う考え方も出てこよう。

表～2・表～3は、H8・8に追加

◎運氣と伝変

- イ. 季節の五行→春＝木・夏＝火・長夏＝土・秋＝金・冬＝水。この五行は、病因として作用する場合には、木＝風・火＝熱・暑・土＝食・労倦・湿・金＝燥涼・水＝氷冷と言う季節の基本的な性質の“気”が、人身に負担をかけるように働くのである。そして、これらが邪となる場合には、五行的に同一の臓腑〈五臓六腑〉に、まるで、共振現象を示しているような、病証表現をとる。例えば、春気の“風”は五行的には“木”であるから、五行的に同一性を帯びている【肝・胆】に響震・共鳴する。他の臓腑にも“木邪”が侵襲するが、その場合には病臓の病証と、木邪の病証として【肝胆の病証】とが、平行して現象するのである。この事を『難経』49難は明瞭に記述している。

- ロ. 病の消長を考える場合には、病臓が季節の推移に対して、どのように反応するのかについても、法則性が見られる事を『素問』蔵気法時論第 22 が記述している。

例えば『木病』の場合では“秋”には病勢が増悪するが、これは“金剋木”の関係性の為である。つまり、“秋”=金であり病は“木”病と言うように、「季節の‘気’」と「病の性質の‘気’」が、“金剋木”の関係形成しているのである。冬には病勢は安定するが、これは、「“冬”=水の気」であるから、病と季節の気との関係が“水生木”となって“母が子を養育する”ことに、なぞらえられるものとなっている為である。春になれば「“春”=木と言う“季節の気”」の故に、まるで、“母親の養育から離れて独立”して行くように、病状は改善される。そして夏になると病は治癒する“夏”=火で「火は木の子」。このような「病臓の五行性」と「季節の気の五行性」との関係は、総ての臓腑に同様に作用していると認識している。

このような循環は、後代には「旺・壯・死・囚・休」として、変化の局面を表現するようになる。

- ハ. 一日を五つの時間帯に区分すると、季節の五行の作用と似通った影響性があることが見受けられる。後には十干を五行に配当していることや、十二支に配当されている五行などを、季節の五行の性質と同様に把えて、前項に述べた論理を援用することも見られる。
- ニ. 今一つ無視できないのは、『素問』四気調神大論第 2 などに見える養生思想である。四季それぞれに適合した暮し方していれば良いが、そうでない場合には、例えば『冬=水=腎』『春=木=肝』『夏=火=心』『長夏=土=脾』『秋=金=肺』のような相関性がある「臓」が「季節の養い」を失うことになっているので、続く季節には、これらの「臓」が病むことになる、と言う考えである。
- ホ. 『難経』56 難の記述は、「積聚」の生成の仕組みと予後論である。「肝の積」の場合については、長く肺の病が治らないでいたものが、「長夏」になってから「肝の積」になる。と言うのは、臓病の伝変の仕組みから言えば、「肺→肝→脾」と言うのが基本的な伝変様式なのであるが、「戊己の日・季節」=「長夏」には「脾」が旺気しているので、「肝→脾」の局面が成立出来なくなっている、そこで、「脾が病邪を受けることを拒んで邪を肝に返す」ことになる、「肝も邪を肺に戻そうとする」のであるが「肺はそれを受け付けられない」ので結局「肝が病を抱え込む」から「肝の積」となると言うのである。同様の論理が「心の積」「脾の積」「肺の積」「腎の積」にも作用しているのである。この点を表示すると次の通りである、
- a. 「脾積」の場合—“長く癒えないでいる肝病”は「壬癸の日・季節」=「冬」には「肝→脾→腎→心」の伝変様式の内「脾→腎」が成り立たないので「脾←腎」となって「脾積」となる。
 - b. 「心積」の場合—“長く癒えないでいる腎病”は「庚辛の日・季節」=「秋」には「腎→心→肺→肝」の伝変様式の内「心→肺」が成り立たないので「心←肺」となって「心積」となる。
 - c. 「肺積」の場合—“長く癒えないでいる心病”は「甲乙の日・季節」=「春」には「心→

肺→肝→脾」の伝変様式の内「肺→肝」が成り立たないので「肺←肝」となって「肺積」となる。

- d. 「腎積」の場合—“長く癒えないでいる脾病”は「丙丁の日・季節」＝「夏」には「脾→腎→心→肺」の伝変様式の内「腎→心」が成り立たないので「腎←心」となって「腎積」となる。

へ. 『素問』『靈枢』に見られる「大過・不及」論の記述も重要な意味を帯びている。

◎患者の回復力

- イ. 『素問』三部九候論第 20 の弾蹠診

筋肉の弾力を診ている。

- ロ. 伝承の“喉嚨診”

所謂‘ソドボトケ’を診者がスライドさせる操作をして‘スジ’の弾力性を診ている。

- ハ. “胃の気”診

趺陽脈を診て後天の気を診る

- ニ. “太溪”脈診

先天の元気を診る

- ホ. “腹力の診”

湯液家は腹力の弾力の強弱によって抵病力を判断して来た

(傷寒論・温病論で伝病論は大いに発達した)

◎色の現われる部位の意義